

『おぼろげの航海』
— Voyage of the Damned —

(1976年公開) ※DVDレンタル・販売あり

ナチスの迫害を逃れ、南米へ向かうユダヤ人
入港拒否されたセントルイス号は海を彷徨う脱出できる喜びと
故国に戻れない悲しみ

第二次世界大戦直前の1939年5月13日、「セントルイス号」は、南米キューバに向かってドイツのハンブルクを出航した。937人の乗客は6人を除いた全員がユダヤ人。元弁護士カールは妻リリアンと娘アンナを連れて出国手続きをするが、手紙や手帳が入った鞆が紛失していた。ナチスに没収されたのだ。移住先での生活のツテがなく、なりシヨックが隠せないカールは、娘に「友達を作りなさい」と言うのが精一杯だった。元ベルリン大学教授で医師のエーゴン、名家出身の妻デニスを連れてVIP対応で乗船。妻は豪華客船旅行気分、場違いなほどにドレスアップしている。病で寝たきりの大実業家ホセとその妻、怪我だらけで丸坊主頭

の男性2人組、幼い姉妹など、ナチスの迫害を受けた彼らの胸中は、脱出できる喜びと故国に二度と戻れない悲しみが交錯していた。

乗客たちを静かに見守るシュレーダー船長は、船旅の間だけは悲しみや苦しみを忘れて過ごしてほしいと願い、「いつものクルーズ」と同じよう豪華なディナーとお酒、ダンスパーティー、笑顔のサービスで乗客たちをもてなすようドイツ人クルーにも命じる。しかし、一部のクルーの態度が悪く、乗客からの苦情が相次ぐようになった。実はクルーの一人にナチスのスパイが送り込まれていたのだ。娯楽室でユダヤ人乗客の感情を逆なでするような歌を合唱したり、恋愛喜劇映画の上映会の途中にヒトラー演説映像を差し込んだり、ヒトラーの肖像画を飾ったり。協力しない若手クルーには容赦せず、暴

力を振るう。船長の動向を探りたいと船長付きグンターをナチス仲間に取り込みたが、グンターは船長室の続き部屋で生活をしていることを幸いに、彼らと一線を画することができた。

ユダヤ娘とクルーが
期間限定の恋に落ちる

グンターは不思議な青年で、ユダヤ人乗客たちを見る目も接する態度も笑顔も親しみに満ちていた。そんなグンターの笑顔に惹かれていったのが、元弁護士カールの娘アンナだった。アンナにとって初めてのクルーズは、豪華で華やかで楽しさに満ちていた。収容所生活のトラウマで苦しむ父を支えてあげたい気持ちはあるが、一緒にいるとせつかくのクルーズが楽しめないのも事実。家族の目を抜け出し、会うようになった二人の恋は、キューバまでの期間限定で深まっていく。

5月27日、キューバ・ハバナ港に入港するが、上陸許可が下りない。今回の航海は、「ユダヤ人が全世界から嫌われている」というナチスの宣伝政策だったのだ。ハバナでは嘘の情報で高まる

ルーズもあった「コスタ・ビクトリア」を進水まで手がけたのを最後に倒産している。

全長175メートル、1万7000トン、8デッキあった「セントルイス号」は事件後に改造され、4年間ドイツ海軍の収容船として使われたが、1944年8月末に連合軍の爆撃に遭う。終戦翌年の1946年に修理され、ハンブルクでホテル船として活躍したが、わずか6年後の1952年に細かく切断の上、鉄屑として切り売りされた。この鉄屑はリサイクルされ、現在も世界のどこかで使われている。

1929年建造
イルピニア号で撮影

撮影で使用されたのはイタリア船「イルピニア号」である。元々は1929年にフランス客船「カンパーナ号」として建造された、3本煙突の蒸気タービン船だった。フランス・マルセイユ・南米の定期航路で活躍していたが、1940年の独仏休戦協定でアルゼンチンに停泊されることになり、1943年にアルゼンチン政府からの要請で「リオ・シヤッカル号」の名でブエノスアイレス—ニューヨークの行き来に活用さ



(イラスト：吉崎 英二郎)

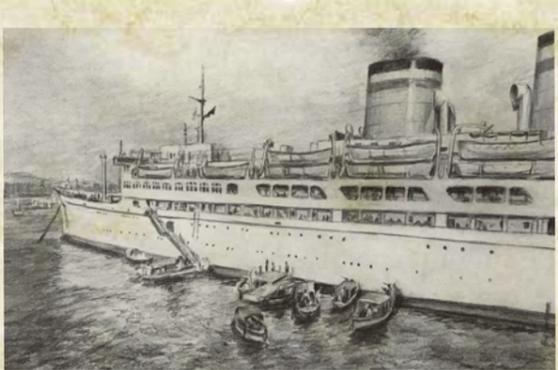
ユダヤ娘のアンナを演じた新人女優リン・フレデリックは、日本で大人気になり、日本の化粧品会社のCMに起用された

反ユダヤ感情を理由に、上陸不許可の決断を下そうとするキューバ大統領と、上陸させるべく根廻しに奮闘するセントルイス号本社やユダヤ人救済機関(JDC)が激しい政治的駆け引きを行っていた。数日後、ついに出港命令が出される。船はアメリカの難民を受入れに期待し、フロリダの海岸線に沿って北上するが、米沿岸警備隊から「これ以上近づいたら攻撃する」と警告される。船はヨーロッパへ引き返すことを決断。船内は絶望に包まれていた。ドイツに戻れば強

制収容所に送られる。グンターによりハンブルクに引き返していることを知った一部の乗客たちは、シージャックを決行。緊迫した操舵室で、船長から「イギリス沿岸で座礁させた後、出火し、無理矢理イギリス海岸に上陸する」計画を聞く。

生き残りの人々に
取材を重ねて

第二次世界大戦直前、ドイツからユダヤ人を乗せた「セントルイス号」が各国から受入れ拒否されて大西洋上をさまよった実話を映画化した。「セント



「セントルイス号」を演じた「イルピニア号」

ルイス号」生き残りの人々から取材を重ねて脚本が作られたという。製作国がイギリスだというのがまた興味深い。最後まで諦めず交渉を続けたJDCのおかげで「セントルイス号」のユダヤ人たちは、オランダ、フランス、ベルギー、そしてイギリスで受入れてもらうことになった。しかし数カ月後に第二次世界大戦が始まり、ナチスは西ヨーロッパの諸国を占領する。1940年以降に大量虐殺を免れることができたのは、イギリスに引き取られたユダヤ人だけだった。

1929年建造
セントルイス号

「セントルイス号」は、西ドイツの名門海運会社「ハンブルク・アメリカライン」(HAPAG)所有のディーゼル蒸気船だ。大西洋横断定期航路のための豪華客船として、ドイツのブレーマー・フルカン造船所で1929年に建造された。この造船所は世界でも有名な艦船を多数製造しており、日本発着ク

れる。終戦翌年1946年に元の所有者に戻り、再び「カンパーナ号」と名乗って南大西洋航路へ。1955年にイタリア船「イルピニア号」として改造される際に、3本あった煙突は2本煙突になる。さらに1962年に大改造、最新のディーゼルエンジンを備えた1本煙突の近代客船に大変身を遂げる。見た目も装備も設備も新しく、快適な地中海クルーズを提供してきたが、大戦を生き抜いた45歳越えの船は、耐航性証明検査に合格するには厳しくなっていく。1976年、廃棄目的の売却のため営業停止される寸前に、この映画の話が舞い込んできた。

「イルピニア号」は「セントルイス号」と同じ1929年建造、しかも現役の船なので、航海シーンも問題なく撮影できる。「セントルイス号」に似せて偽煙突が2本着けられ、バルセロナ・ポトヴェルの海で撮影された。映画撮影後、地中海クルーズに2年間従事後、1981年に耐航性証明検査で不合格、1983年に解体された。

(クルーズ映画ライター あいさわみき)

訂正とお詫び 2020年3月号の「カットスロート・アイランド」の公開年の記載内容に誤りがありました。正しくは1995年公開でした。ここに訂正し、お詫び申し上げます。